

# 社会科教育

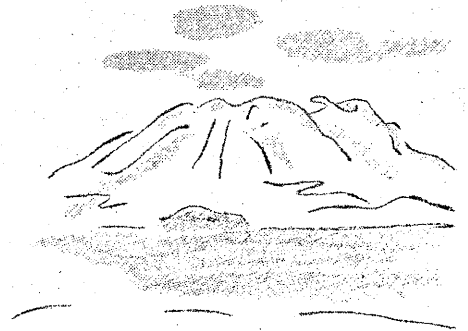
## 歴史教育と道德教育

服部良一

自分の目で完、自分の頭で考え、自分自身で責任ある行動をする自主性  
社会性ある人間を育成するには、社会科は最適な科目である。しかし現在の  
社会科は過渡的な段階にあり、多くの問題をなげかけている。  
三・四年生は、四週間にわたる教育実習も終わり、多くの問題、疑問な  
りをもつて大学に帰つて来た。この問題点疑向点を、単に自分個人の向題  
としてほうむり去るのでなく、全体のものとして考えていかなければない  
。そのため、こゝに社会科教育に關する記事をとりあげた。

課題のようなことを書いてみようという気持ちになつたのは、  
先般教育実習生のいむゆる時々の授業を観た手から離れられる  
。即ち、本人が書いた指導案の、本時の目標に、道德教育オ  
ンリーの目標を二項自ばかりかゝつていたのである。果はこの  
授業が中学校二年の社会科、つまり歴史的分野の指導で、「鎖  
国」を中心にしたスライドなどを使用して、かなりうまくやってい  
たのであるが、。問題は、訓練めいた道德教育を本時目標に  
つけ加えねば、指導案の体裁をばさばさし本人が意識しだかし  
ぬいかば、敢て問うまでもない（尤も本人の授業それ自体には  
道德教育は目標にかゝつてゐるにもかゝらず、殆んど出ていな  
かつたので、歴史の授業としては一応成功したのであつたが）  
一般には社会科教師の道德教育に對する関心は非常に深いよ

うである。それは、「学校における道德教育は、本末学校の教  
育活動全体を通じて行う事を基本とする（小・中学校学習指導  
要領）」ことは当然だが、なお従来、社会科が他教科に比して  
道德教育の分野に相当な比重を占められていたことは、例えは  
昭和三十年版の小・中学校の学習指導要領（社会科編）を瞥見  
しても分明である。また、今度の改訂学習指導要領でも、小学  
校社会科の目標で、「社会科は、社会生活に對する正しい理解  
を得させる事によつて、児童の道德的判斷力の基礎を養ひ、望  
ましい態度や心積の裏づけをして行くという役割になつてお  
り、道德教育について特に深い関係を持つものである」と、指  
適している。そんなわけで、一般教師の中でも特に社会科教師  
は、道德教育に敏感なようである。



そこで、歴史教育と道徳教育が一体とならざるもつてい  
 のか、そんな点について広い立場から思いつくまゝに、二・三  
 の点にふれてみたいと思う。尤も歴史教育といつても、中学校  
 二年の子れに限定するのでなく、小・中学校の社会科教育全般  
 の流れの中で考察してみたい。

リアルな教育をねらいとする社会科が、その生誕の基礎にお  
 いて、「歴史性の否定」を必須の条件としなければならな  
 かつたところに、戦後わが国社会科教育の悲劇性があることを  
 私はしばしば指摘して来た。ほとんど連年改訂を繰り返して来た  
 学習指導要領の不満といつたものも、素外こんな魁にもとづく  
 と私は見てゐるのだが、。それはとにかく、来手（小学校  
 ）、来々年（中学校）完全実施の改訂指導要領を見ると、歴史  
 教育の分野からはかなり綿密な配慮がほどこされてゐるよう  
 なつたのは、やはり進歩の一面として喜ぶべきであらう。

いま、改訂指導要領の社会科の目標のうち、歴史教育に關す  
 る部分と抽出してみると、小学校の場合、  
 「人々の生活様式や社会的な制度、文化などのものゝ意味と、そ  
 れらが歴史的に形成されてきた事を考えさせ、元人の業績やす  
 ぐれた文化遺産を尊重する態度、正しい国民的自覚をもつて國  
 家や社会の発展に尽そうとする態度などを養う」とする、目標  
 5が該当する。

中学校では目標3の

「われわれの社会生活は、長い歴史的経過をたどつて、今日に  
 及んでゐることを理解させ、歴史の発展における個人や集団の  
 役割を考えさせ、よい伝統の継承や社会生活の進歩に対する責

任感を養う」と、いう部分がそれである。（尤も社会科目標の  
 五項目が、有机的関連を持つてゐるので、他の地理的分野や、  
 法、哲、倫、経、政、社の分野の目標と切りはなして考へては  
 らないのは、中学校社会指導書（P95-10）をまつまでもなく  
 自明である）

更に、小学校社会科の各学年の内容についてみると、歴史意  
 識を養成する上に、その系統性と言つたものを、相当配慮して  
 いるようである。すなわち1年の「家庭の衣食住、自分たちの  
 遊びや、生活のしかたなどには、季節によつてさまざまの  
 違いがある」とことや、「道路や建物などには、古いものと新し  
 いものがあり、また道路工事が行われたり、新しい建物が出来  
 たりなどして、近所のようにすも変つていく」とことに、断片的意  
 識をそだてようとする。

2年では、「いろいろの仕事をやる人の使う道具や機械を  
 んと、便利になつてきたものが多い」とを、具體的な学習を  
 通して比較観察させる。これは勿論、時代順にその変遷を見る  
 といつた必要はないのだが、。

3年になると、「村（町）の人々は、昔から神社や寺院など  
 を中心として祭りの他の行事を催し、祭しみをともししてきた  
 」ことや、「村（町）の人口や集落の状況、人々の仕事の種類  
 や方法、道路の様子などを見ても、父母や祖父父母の子供のころ  
 に比べて変つた点が少ないが、そこには鉄道やバスの南通、  
 道路や港の改修、工場の設置など、村（町）の人々のいろいろ  
 な努力があつた」とを知らせる。この学年では、昔を祖父父  
 母の段階から考えさせようとする訳だ。これらの指導には、歴史

的資料（史跡、記念碑なども含む）も、児童の興味に応じて取り扱う事もすゝめていたのである。

4年ぐらいになると、児童の歴史意識もぐんと伸びる時期と普通されているが、「自然へのゆきかけや、暮しのくふうは、大昔の人々の衣食住の様子や生産のしかた、さまざまの用具などにもいろいろなかたちでみられ、その様子は現在の自分たちの生活と比較して大きな違いがある」と、昔と今といつた対比の形でうけとめさせるが、これも人類一般の文明発祥史でなく日本の具體的な歴史でとり上げられる事を注意している。更にこの学年では、「人々の旅のしかたや物資の輸送のしかたは、江戸時代と明治以後とでは、道路の発達や、新しい交通機関の出現、世の中の変化などに伴つて著しく変り、便利になつた」交通の発展を指導することになつてゐるのも、従来の指導要領のうけつぎであるが、この学年で地図帳が使用され、空間的意識のひろがりと共に、これらの指導には「特に視聽覚資料や歴史年表などの活用」を留意させている。

5年では、地理的な分野の学習が相当はみ出すようだが、なお「商業の発達に伴い、国内国外各地からの原料の入手、あるいは製品の販売等が重要になり、市場、向産、小売店などがたいせつなはたらきをしているが、このような商業のしくみは、次第に発達して来たものである」とする分野にも、歴史的要素があるが、指導要領は児童の能力を考へ、詳細な商業史にわたる事のないようにと、注意を示している。

こうした学年を遡うて、歴史意識の系統性の上に、6年になると、一応政治史を中心として日本史の全体的把握をさせる次

才である。できるだけ具体化するために、人物教材の活用も考慮し、文化の取扱方にも児童に新しき深いもの、かほ文字、大仏、その御尊名な社寺など取り上げるなど配慮してゐるが、この6年になつて、前掲の社会科の目標が遂げられるものと思ふべきである。

以上、学習指導要領に従つて、児童の歴史意識の発展をおさえてみたのであるが、こうした基礎の上に、中学校の歴史教育が展開されるわけである。

中学校では、歴史を学習する2年の学年目標をみると、8項目が、は、その何れが欠けても学年の学習目的を達成されないとしてゐるのである。いまそれらを、次に要約してみる。

まず才一に、歴史的現象の理解である。そして、直面する現象の問題を發展的・歴史的に把握する態度を養ふこと。これが歴史教育の総合的ならわいである。才二に時代概念の把握、歴史の変遷の総合的理解、各時代の歴史的意義を知らせる事が基礎的な学習であると示す。才三に日本史の世界的視野からの理解である。孤立した日本史でなく、世界史の中に息づく日本史の指導ということ、言うべくなく、難しいが、才四に、近代史重点を指示するのは当然である。それには、「民主主義の成立と発展」「近代産業の形成」「国際関係の推移」「近代文化の成長」を、四つの柱とすることゝ指導書は述べる。才五は人類の歴史的発展の個性的なもの、普遍的なものについて理解させる事である。真に個性的なもの、國家・民族等の協力に於て世界史が形成され、世界平和の実現も果されることの理解と、意欲を養ふことである。才六は、人間の持続する

營爲は歴史である事、努力は歴史である事の理解である。才七は文化遺産の尊重と、文化遺産者としての夫を養うことである。才八は、史証的・科学的態度の養成である。

以上、学年目標を要約、羅列して又たわけであるが、中学校歴史教育の相いざる各々察知し得よう。

要するに歴史教育の相いは、歴史的な知識を媒介としながら歴史的態度を訓練するにあると云えよう。

歴史的な態度の訓練、それは歴史的な感覚之身につけさせる事である。歴史的な感覚とは「発展」と「個性」の意識である。いまこれらについて、くだけく、しく述べる余裕もないし、又必要もなからう。ともあれ、文化的平和国家の形成者として、新鮮で調るい自主的、積極的な努力人が要請されること、その育成を指向する国民教育の責務は重大である。この義務教育の不可欠な陶冶の分野として、歴史的感覚があるのである。それは濃厚な人格の輝きをもたらす感覚である。

以上のように、歴史教育のねらいをまとめると、大まかに意味でこれは道徳教育だと言えらる。しかし、狭義のいわゆる道徳教育とは、明白に異なるのである。歴史上の人物の行動を通じて、性急な教訓をそこから与えようとする近視眼的な教師の道徳意識は努めて避けるべきである。これでは歴史教育は破壊される。かゝる勸善懲惡趣味は、歴史教育を急せしめ、戦前の善玉・悪玉式の送つべからぬ人間観に陥るおそれがある。歴史教育はもつとおどがなものである。偏狭な論理主義を超えて、時代の発展の中に、もつと本質的な濃厚な人間観を把握させることを相つてゐるのである。歴史教育に、手から口への頓服的

効果を期待されるとしたら、それは何等かの企図をもつて、側から牽引性を強要する歪んだ教育になり得るだろう。それに付けても思ひ出すのは、数年前、或る高等学校で日本史の研究授業を見たときの事である。何かの單元を終つて、その反省として各自の実践に結びつけようというような事で、生徒の実行しようと思ふことと区、一時間中一問一答式に発表させているという授業だった。全く只変りな授業で、生徒が、自分以鉛筆は手びてしまふと使えなくなるので不経済だから万年筆を使ふ事を決意した。と、いつたような答を返しているのに、哑然としたものである。この高校生幼稚さ、そして、歴史における実践。という意味をこんなに変易な筋肉活動の意味にしか解しない教師の意識に、。、。歴史争象の中に、歴史意識を隠り下しようとする企てこそ、真の意味の歴史的实践と思えるのに、。、。

則で、特設道徳において人物を扱う場合、偶々歴史的人物が教材とされるとしても、勿論、過去の修身のような徳目中心でなく、もつと異つた魅力的な取扱いで出て来るだろうが、向と言つても道徳性が先走るのは当然の事、人間観と云つたものは断片的、挿話的なものになる。歴史教育での人物の取扱いは歴史的發展といつたものを把握するために、時代との関連において出てくるもので、人間把握の立場で一層全体的、連続的と言えよう。かく考えてみると、歴史教育の立場と道徳教育のそれは相反自し、制約するかのようにも思われる。しかし、大衆的兎地に立つなら、歴史教育と道徳教育は、むしろ相補的なものといふべきであろう。

歴史意識が道徳性を深め、道徳性に淨化された歴史意識が、目的を支えているといった相補性こそ、私達は看過してはならないのである。一したがって社会科の指導を通して、育成される判断力が、道徳の傾向において、児童の道徳性について、自覚としていつそう深められ、この自覚が、たゞが社会科における学習に生きてはたらくように指導する事が望ましい。へ小学校社会科目標」とする立場も同じ事を言っているのである。

歴史教育が成功するためには、それは児童、生徒の魂をゆさぶる教育でなければならぬ。形骸の教育でなく、教師の愛情と熱情が、ひたむきに子供の魂に喰いこむ教育である。こどもを歴史の渦中に引き入れ、そのものなりに感得させる。剛えば大正彦少年使節にふれ、ば、万里の冥輝に悉父の命をうけ、肉親の母の悲嘆をふり切つて、日本人として始めて出発する同年

輩の少年たちの英雄的決意に、単に畏敬の念を覚えさせるだけでなく、時代こそ異れ、君達もまた大きな困難に直面してもそれをのりこえて行くだけの勇氣をたしかに秘めているのだと、羨望したら、彼等の賑は共感に輝くだろう。

また、スルターク。の伝記から、アレクサンダーの帝国が瓦解したのも、その天折が主な原因とすれば、その不健康が、彼の大酒など遠征中の不根生が災いしたと見られなくもない。そこからまた生徒に、健康の重要性、自製の徳など知らしめるのも、こうした教訓がむき出しに出てくるのでなく、歴史的発展の大きな潮の中に適当に浮べられるなら、それは強い光輝を発して、潮を美しく彩ることであろう。